

..... 解 説

三重県における豚病清浄化へのみち

亀山和夫* 中井 勤*

三重県養豚の概況

本県における養豚の推移は、表1のように飼養頭数では昭和45年を頂点とし、ここ数年は減少の方向にある。飼養農家数についてはさらに落込みが急であり、もともと1戸当り平均飼養頭数が全国レベルより高かったものが、本年度には60.3頭/戸となった。このことから本県養豚は、中京、近畿経済圏を背景とした企業的色彩の濃い大型一貫経営のものが主体となる結果をまねいている。最近の飼養頭数ならびに戸数の減少の主な原因となっているのは、都市化、工業化が農村部へ波及していることとともに、四日市公害に代表される住民の公害意識が高揚していることから、家畜の糞尿処理に対しても厳しい批判にさらされ、中小規模の養豚家が廃業していったことによるものである。このような傾向は、本県の公害苦情の発生率が人口当り全国一ということからも推察されるであろう。一応、最近では飼料、資材の異常な高騰により養豚が致命的な打撃を受けていることか

ら、今後の養豚数の飛躍増大を期待するには厳しい情勢にある。それらの実情を反映して本年4月には県内養豚団体による「養豚危機突破大会」が初めて開催されるなど、窮地に追い込まれた状況から脱却するためにかつてない積極的な行動が目立っている。

以上のように困難な状況に置かれている本県養豚界ではあるが、都市近郊畜産としての立地条件を生かし、蛋白資源の確保、生産性の向上等の見地から「三重県畜産振興方針」（昭和47年）が策定され、養豚をとりまく厳しい情勢にもかかわらず昭和52年度において現状の約倍増の218,000頭の増殖を目指している。

この方針中、現状分析として特にSPF豚に触れ、「SPF豚により多頭飼養における収益性の増大と経営の安定化を図ろうとする動きが活発になりつつある」と述べられており、本県におけるSPF豚に寄せる関心は、経営形態が大型一貫経営へと脱皮するにつれ年々高まっている。

表1 三重県養豚の推移

年次	飼養頭数	飼養農家数	1戸当り平均飼養頭数
45	138,840 ^頭	3,700 ^戸	37.5 ^{頭/戸}
46	135,890	3,620	37.5
47	137,000	2,860	47.7
48	116,000	2,400	48.3
49年2月	111,000	1,840	60.3

* 三重県農林水産部畜産課

三重県清浄豚研究会の発足

SEP, AR に代表される豚慢性疾病の発生率は本県においても非常に高く、これらによる推定損失額はおよそ6億円を越え、畜産粗生産額220億円の2.7%を占める大きな損失と考えられる。特に昭和46年頃から県内仔豚市場を通じて買い上げを行なっている肥育業者から、疾病による事故発生率が非常に高い旨苦情が寄せられている。その原因について家畜保健衛生所で調査したところ、そのほとんどがSEPを原発とする細菌の二次感染による急性化膿性肺炎によるものであった。この調査の過程で、AR, トキソプラズマ症, 豚赤痢, コリネバクテリアウム症なども予想以上に浸潤していることが判明し、その清浄化対策を早急に進めていかねばならないことは当然で、各関係機関で善後策が検討された。その結果当面の対策として、消極的な方法ではあるが、薬剤の投与、消毒の徹底で、これら慢性疾病の病勢を可能な限り抑えることとする方向で対策を進めていくことになった。一方、これと並行して抜本的な対策として、畜産目的として普及が進めつつあるSPF豚について真剣に検討すべき時期が到来したと考え、昭和47年度に農協中央会、経済連、県農業技術センター畜産部、県畜産課改良増殖係および衛生係により構成される三重県清浄豚研究会が発足し、SPF豚を中心とした豚病の清浄化対策について検討が続けられている。

ところで、家畜保健衛生所ならびに地域防疫協議会が中心となって清浄化を農家に指導徹底することと、SPF豚に対する理解、普及を深めるために、数度にわたり積極的に講演、講話会を開催した。一方、指導者側のSPF豚に対する知識を深める意味で担当者1名が半年間にわたり、農林省家畜衛生試験場SPF豚生産研究室で研修を受けるとともに、すでにSPF豚の実用化を進めていた千葉、新潟、岡山の各県および民間関係各社を訪ね、参考となる貴重な意見を収集し、今後本県における本事業の推進の方向について検討を続けてきた。

清浄化への基本方針

以上のような背景から研究会で煮詰められた基本方針を「養豚場において現在最も大きな経済的打撃を与えている豚慢性伝染病を根本的に排除し、家畜経済衛生の観点から特定疾病のない豚を作出し、その生産構造の改善と向上を図る」とし、さらにこれに伴う具体的な推進方策として、

- 1) 三重県清浄豚協会の設置
 - 2) 推進班の編成
 - 3) モデル養豚場の指定育成
 - 4) 地域における種豚センターの設置
- などをすすめていくこととなった。

ここで一言説明を加えなければならないのは、本県でいう清浄豚とは広義の意味が含まれていることである。すなわち、研究会で種々検討された結果、本県における豚病清浄化の方策はSPF豚のみに限定せず、現在の技術で清浄化が可能と考えられる全ての方策によって作出された特定疾病のない健康な豚を清浄豚と称することとした。

また、清浄豚を生産し得る生産技術体系として、

- 1) SPF豚による集団変換
 - 2) 産道消毒法による清浄化
 - 3) スエーデン方式による清浄化
- また可能な範囲で
- 4) 薬剤の使用による清浄化

の四つの方法により目的とする健康な豚、すなわち清浄豚を増殖していくこととしている。

このように清浄化の方法を多様化した理由は、清浄化しようとする飼育者の衛生に関する知識、技術のレベル、経営形態、あるいは求めようとする清浄度の程度等に幅広く対応できると考えたためである。

以上の方策に沿った観点からSPF豚を中心とした冊子「清浄豚の手引き(病気のない健康な豚を生産するために)」を取りまとめ関係機関および農家に配布した。

現在までに実施されているのは後に述べる紀和町におけるSPF豚と、立地条件にめぐまれ

紀和町における SPF 養豚場の開設

昨年秋から本県南牟婁郡紀和町で大規模な SPF 養豚場の開設計画が進んでいる。紀和町は紀伊半島南端部の三重、奈良、和歌山、3 県の県境にほど近く、漕八丁のプロペラ船で有名な吉野熊野国立公園に含まれている人口 4,000 余の林業と鉱業（石原産業紀州鉱山）の町である。地理的に非常に不便であることから、昭和 46 年に過疎地域の指定を受けている。畜産に関しては県肉用牛振興地域であり肉用牛の飼育

が中心で、豚については 6 戸の農家がわずかに飼育しているにすぎない。したがって SPF 豚の汚染防止の観点から、条件的に最適地であると言えよう。

今回 SPF 養豚場が計画されているのは同町大河内地区で、山間部の小さな沢を挟んだ両側の傾斜地を整地し敷地面積約 63,100 m² に畜舎 15 棟および関連施設が建設される計画で（図 2）、すでに一部の完成をみている（写真 1, 2）。この計画の推進母体は、元紀和町長であるとともに畜産に対しても造詣の深い榎本禎信氏を中

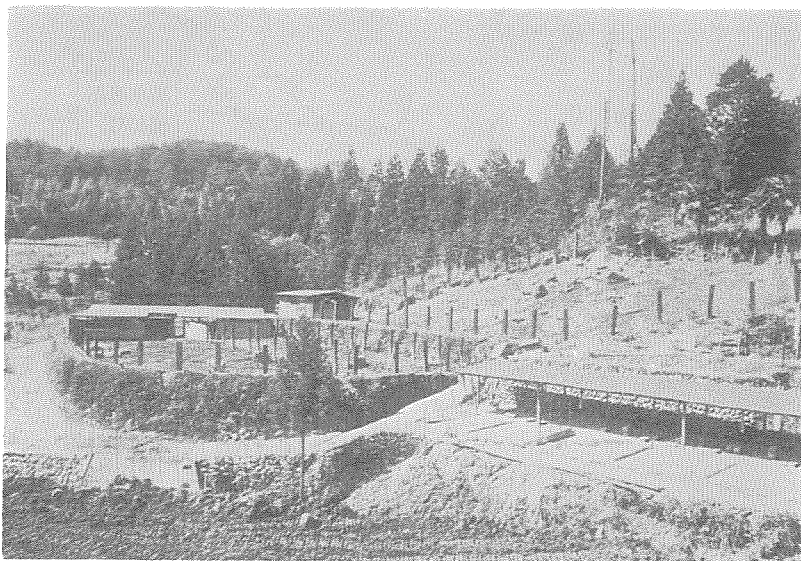


写真 1

整備中の放牧場および豚舎。すでに一部放牧されている。

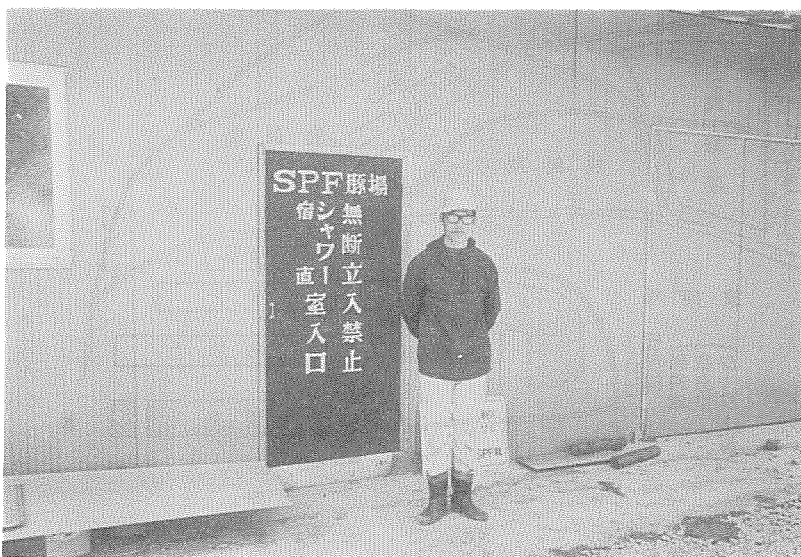


写真 2

完成した管理棟

表2 紀和町 SPF 養豚場整備計画

年 度	主 な 整 備 事 項	繁殖豚導入計画
48	土地造成25 a, 園内道路 400 m ² . 管理舎 1 棟, 繁殖豚舎 736 m ² . 育成豚舎 821 m ² , 糞乾燥施設 1 基, 汚水処理施設 1 セット	♀ 250 (F ₁) ♂ 15 (純)
49	土地造成 115 a, 園内道路 600 m ² , 肥育豚舎 3 棟, 管理舎 1 棟, 糞乾燥施設 1 基, 焼却施設 1 基, 汚水処理施設 2 セット, 堆肥舎 1 棟. 飼料タンク 3 基	♀ 350 (F ₁) ♂ 21 (純)
50	土地造成 8 a, 糞乾燥施設 1 基, 飼料タンク 1 基	♀ 300 (F ₁) ♂ 18 (純)
51		♀ 150 (F ₁) ♂ 9 (純)

心とする 5 名により構成された農業法人, 紀和町牛豚飼育組合である。

本計画の概略を示すと表 2 のようになる。すなわち 4 ヶ年計画で昭和 51 年度中に完成を予定しており, 最終的には繁殖豚 800 余頭による一貫経営で, 総頭数 5,000 頭の SPF 養豚場が開設されることになる。

種豚は住友飼料畜産から導入し, 品種は LW, LH の♀に対し L, D および H のそれぞれ純粋種の ♂ による三元交配により行なわれることとなっている。

これらの飼養管理技術修得のため組合員 1 名が半年間, 住商鬼怒川農場で研修を終了しており, さらに衛生指導にあたる紀州家畜保健衛生所技師 1 名もあわせて研修を終了し指導, 運営に支障のないよう万全を期している。

本計画が実現されるに至るまでに最も問題となったことは, 糞尿処理をどのように行なうかという点であった。冒頭で述べたように紀和町近隣の町村で 18 件の公害問題が発生しており, このうち 5 戸が廃業の止むなきに至っている。しかも今回の計画は本県で最大規模の養豚場となるだけにこの問題については慎重に検討された。その結果, 乾燥施設 3 基, 焼却施設

1 基, 活性汚泥処理施設 3 セットにより完璧を期すこととし, ここで生産された乾燥糞は同町森林組合などに契約販売される予定である。

今回の計画 実現にあたって “SPF 豚はか非か” という論議から始まって具体化されたわけではなく, 単に糞尿処理問題のみが討議の対象となったことは, 研究会等によってすでに SPF 豚について基本的事項の理解がなされていた結果, これはすでに本県では SPF 豚に対する評価が定着していることを物語るものである。

む す び

本県における豚病清浄化への道は紀和 SPF 養豚場の開設によりその第 1 歩が開かれることとなり, さらに新設養豚場への SPF 豚導入の気運もあって, 本事業の成否が今後の本県 SPF 豚推進の鍵をにぎるものでもあり, 行政的にも積極的な指導, 援助が必要であろう。

わが国における今後の養豚界は, ひとつの技術的転機に立たされているが, たとえば日本 SPF 豚協会に代表される新しい変革の動きなどを通じ, 当面する困難な養豚事情から脱却しななければならないと考えている。